

続・僕の図書館戦争(β版)

中 相作

実録
漫才
あほまん列伝

芭蕉さんはまた行く

「一年間のご無沙汰でございまして」

「早いもんですね実際」

「去年の秋に出た本誌第二十三号のつづきゆうことになるんですけど」

「わざわざつづきやる必要もないのところがいますか」

「君それなにをゆうてるんですか」

「どないしました」

「僕らの漫才ほど伊賀地域において必要とされてるものはほかにないんですから」

「どのへんが必要とされてますねん」

「必要のないものに対してそんなものは必要ないんだと指摘してやる漫才として必要とされてるんです」

「今年の漫才もなんやまたややこしそうですな」

「去年の漫才でも指摘してやったんですけど」

「なんの話題でした」

「伊賀の蔵びらき」

「君まだその話つづける気ですか」

「芭蕉さんは行かずにたくさんのあほさんが行った官民合同事業の『生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき』にかんして指摘をいたしました」

「たしかにあれこれゆうてました」

「二〇〇四年の事業でしたけど」

「ちようど十年前になります」

「あの事業をめぐる『伊賀百筆』第二十三号に僕が残した名言を君おぼえてませんか」

「そうゆうのはとくになかったと思いますけど」

「伊賀地域住民の魂を震撼させた名言です」

「どんなでした」

「虎は死して皮を残し伊賀の蔵びらきは大失敗に終わってあほを残す」

「そのどこが名言ですねん」

「あの名言は地域社会の真実を無慈悲なまでにえぐり出していたんです」

「いったいどんな真実ですね」

「伊賀市といえますか旧上野市といえますか要するにあそこらあたり」

「なんぞ問題でもあるんですか」

「十年に一度のことですけど」

「大雪でも降りますか」

「西暦の下一桁が四になる年にかぎってわいて出るらしいんです」

「なにがわいて出ますねん」

「ゆうたら害虫みたいなものでしょうね」

「害虫で君」

「鳴き声もわかってますから」

「なんちゆうて鳴きますねん」

「バシヨースンガーバシヨースンガーバシヨースンガーバシヨースンガー」

「君もかししたら『芭蕉さんが』ゆうのんくり返してるだけなんとちがいますか」

「バシヨースンガーバシヨースンガーゆうて鳴きながら十年に一度わいて出る害虫がいるらしいんです」

「そんな話は聞いたことありませんけど」

「伊賀市には芭蕉が生まれた年を起点として十年単位で記念事業を実施する風習が残ってるみたいでして」

「たしかに十年前には『生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき』がありましたね」

「あの血税三億円をどぶに捨てて目もあてられない大失敗に終わった伊賀の蔵びらき事業の関係者は税金つかうだけついたらさっさと逃げてしまいましたけど」

「逃げてしもたゆうたら人間きが悪いですがな」

「けつまくつてとんずらかましてしまいましたけど」

「表現としてはより悪い方向に進んでませんか」

「逃げてしもただけで絶滅してしまっただけではないですからね」

「なんで絶滅せなあきませんねん」

「伊賀の蔵びらきの残党のみなさんは地域社会に生息して虎視眈々と次の機会をうかがっていたわけです」

「豊臣の残党みたいないいかたですけど」

「名張市においてはまちなか再生事業で暗躍して事業の大失敗に一役買ってくれましたし」

「その話はもう聞きあきました」

「乱歩蔵びらきの会という残党の一回はいまも名張市で活動してくれていますし」

「好きなように活動してもらったらよろしがな」

「ある意味勇氣ある活動ですけどね」

「乱歩蔵びらきの会のことですか」

「蔵びらきという言葉を団体名に使用するのは手前どもは『生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき』の残党でございますのでいくら石を投げられても文句はいりませんゆう看板を堂々と掲げて歩いてるようなもんですからたしかに勇氣はあるんです」

「君ほんましまいに叱られますから」

「ただまあ伊賀の蔵びらきのことはいまや完全に忘れられてますからその点が救いといえれば救いでして」

「べつに救われる必要はないと思いますけど」

「それで伊賀の蔵びらきのがすっかり忘れ去られてからまた西暦の下一桁が四になる年を迎えました」

「芭蕉の生誕記念事業の年が巡ってきました」

「そうゆう年やからゆうてなにかせなあかんわけではないんですけど」

「でも記念事業をやったらあかんゆうことでもないですからね」

「そこなんですわね」

「どこですわね」

「まさにその点なんです」

「せやからどの点ですわね」

「記念事業が必要なのか必要でないのかという問題に客観的で正当な判断をくだすことが地域社会から僕らの漫才に求められてるわけなんです」

「そんなこと絶対にはないと思いますけど」

「つまり僕らには伊賀市民の負託にこたえてこの漫才をやりとげねばならないという責務があるんです」

「伊賀市民の誰ひとりとしてそんなことは望んでませんやろ」

「ただし僕は伊賀市民ではなくて名張市民ですから」

「それやったらおとなしいしてたらよろしがな」

「伊賀の蔵びらき事業の残党が十年後の今年どれだけ伊賀市にわいて出てバショサンガーバショサンガーゆうて鳴いたのかは正確には把握できません」

「そんなこと把握してなをしますわね」

「ですから把握しないまままで漫才を進めたいと思いません」

「なんや話が無茶苦茶ですけど」

「けどしよせんなんにも考えんとバショサンガーバショサンガーゆうて喜んでるだけという点では誰も彼も同じ穴のむじなですからね」

「なんにも考えんと好きなことゆうて喜んでるのは君のほうやないですか」

芭蕉さんは行けない

「伊賀市ではじつは去年からもめてまして」

「君そうゆう話がほんまに好きですね」

「去年の九月議会で伊賀市がある提案をしたんです」

「芭蕉生誕三百七十年記念事業の提案ですか」

「さつぽろ雪まつりに芭蕉の雪像を設置して伊賀市が

芭蕉生誕地であることを広く全国にPRしたい」

「そういえば新聞でも報じられてました」

「そのための予算八百一万円を組み込んだ一般会計補正予算案が九月議会上程されたんですけど」

「たしか市議会が待ったをかけたゆう話でしたね」

「雪まつり関連の予算は執行を凍結するという付帯決議案が賛成多数で可決されました」

「なんで凍結ゆうことになったんですか」

「そもそも雪まつりだけに凍結がつきものなんです」

「大喜利やってるんやないんですから」

「伊賀タウン情報YOUのウェブニュースによりまして『田山宏弘議員が「市民を巻き込んだ議論の中から

発生したものは言い難く、費用対効果などの説明も

不十分と指摘せざるを得ない」と説明。採決は定数24

人のうち、議長を除く19人が賛成、4人が反対という

結果だった』ゆうよなことでした」

「ほぼ八割の議員が凍結に賛成ゆうことですか」

「議論がとか説明がとかいろいろ意見はあったみたいですけど伊賀市議会の本音は結局ひとつですから」

「本音でどんなんですねん」

「おんどれやあほんだら議会なめとつたらえらい目に

遭わずぞらおんどれやあほんだらおんどれや」

「そんながらの悪い議会がどこにありますねん」

「そのあと十月の全員協議会で凍結を解除するかどうかが話し合われたんですけど最終的に解除しないゆうことが決まりました」

「さつぽろ雪まつりに芭蕉の雪像は設置しないと」

「そうゆう結末になってしもたわけなんですけどこれ

最初からおかしな話ではあったんですね」

「どのへんがおかしかったんですか」

「芭蕉は北海道へ行きたいと思いつながらその夢を実現

することができなかったという話が前提でした」

「ほんまなんですかそれ」

「そう。まさにそうゆう話なんです」

「どうゆうことですねん」

「君程度の人間でもほんまなんですかそれと素朴な疑問を抱いてしまうほど眉唾もの話なんです」

「君程度の人間ゆうことはないやろがな」

「伊賀タウン情報YOUのウエブニュースによりますと去年の九月議会において『市は芭蕉が自らの人生を振り返った『幻住庵記』に、津軽海峡を渡って北海道に赴きたかったが、同行した弟子から病弱を理由に引き止められたことが綴られており、「翁の思いをかかえるため」と企画したという』ゆうよなことでした」

「それやったらちゃんと根拠のある話ですがな」

「けど芭蕉ゆうのは江戸時代の人ですからね」

「そんなこと誰かて知ってます」

「つまり芭蕉が生きていた時代には上野発の夜行列車もなければ青函連絡船もなかったんです」

「あるわけがないがな」

「凍えそうな鷗を見つめて泣いている女性が津軽海峡近辺にいた可能性は一概に否定できませんけど」

「いったいなんの話をしてるんですか」

「かりに北海道へ行ってみたとしても函館の女や小樽のひとが待ってくれてるわけでもなし」

「あたりまえですがな」

「摩周湖は霧に抱かれて静かに眠ってるだけ」

「さつきから歌の文句ばっかりですけど」

「襟裳の春はなにもない春です」

「そんな森進一さんの歌そのままやないですか」

「そんな時代に芭蕉が北海道へ行きたがってたゆうよな話を君はすんなり信じられるんですか」

「けど『幻住庵記』に書いてあるゆうことですから」

「せやからそれがおかしい」

「なにがおかしいんですか」

「『幻住庵記』にそんなことが書いてあったという記憶が僕にはまったくなかったんです」

「忘れてしもてたんどちがいますか」

「僕もそう思て家にある新潮日本古典集成の『芭蕉文集』という本を開いて確認してみたんですけど」

「どないでした」

「北海道のことなんかまったく出てこないんです」

「それは妙ですね」

「こらおかしいなゆうので専門家にお聞きしてみることにいたしました」

「どなたにお聞きしました」

「この手の話は伊賀市の芭蕉翁記念館に電話一本入れたら懇切丁寧に教えていただけますから」

「あの上野公園のなかにある記念館ですね」

「そうすると信じられないような驚くべき事実が浮かびあがってきたんです」

「そんな君たいそうな」

『幻住庵記』は芭蕉が『おくのほそ道』の旅を終えてから書いた短い文章でして

「つまり晩年の作品ですか」

「芭蕉四十七歳のときの作品ですから死去の四年前ゆうことになりましたね」

「そしたら『おくのほそ道』の旅が終わって伊賀へ帰ってたところですか」

「いったん帰郷はしたんですけどそのあと大津の山にあつた幻住庵ゆうとこに四か月ほど滞在しましてね」

「幻住庵で書いたから『幻住庵記』ですか」

「疑いながら書いたら疑心暗鬼ですけど」

「しようもないこといわんでよろしねん」

「記憶だけに頼って書くのが丸暗記ゆうやつでして」

「もうええゆうのに」

「それでその『幻住庵記』には一般に流布してるもの以外にバリエーションがあつたらしいんです」

「バリエーションといいますと」

「異稿といいますか異文といいますか」

「なんのことですぞねん」

「一般に流布してるものとは微妙にちがうところがある文章のことです」

「なんでそんなものがありますねん」

「たとえば完成した文章とその下書きという二種類の原稿があつてその下書きが世の中に出た場合」

「下書きがバリエーションゆうことになるわけですか」

『幻住庵記』にも米沢家本と呼ばれるバリエーションがあつてそこには北海道が出てきてるんです」

「一般に流布してる『幻住庵記』には北海道のことは書かれてないけどその米沢家本の『幻住庵記』には北海道のことが書かれていると」

「芭蕉翁記念館に電話を入れてそうゆうことを懇切丁寧に教えていただきました」

「そしたらたとえバリエーションでも『幻住庵記』に芭蕉が北海道へ行きたいと思つていたと書かれてるんやつたらべつに問題はないのどちがいますか」

「ところがそう簡単なものやないんです」

「どうゆうことぞすねん」

「米沢家本は小学館から出た日本古典文学全集の『松尾芭蕉集』に収録されてまして芭蕉翁記念館からはそのコピーもファクスしていただいたんですけど」

「なにか問題があつたんですか」

「そのコピーから信じられないような驚くべき事実が浮かびあがつてきたんです」

「君さっきからそればかりですがな」

「君さっきからそればかりですがな」

芭蕉さん立ち往生

「たしかに北海道は出てくるんですけど」

『幻住庵記』の米沢家本の話ですね」

「もちろん当時のことですから北海道ではなくて蝦夷という言葉が使用されてます」

「北海道という地名はまだありませんでした」

『松尾芭蕉集』収録の米沢家本から引用いたしますと『猶なほとふ啼なくそとの浜辺より、糸いとぞが千ちしまをみやらむまでと、しきりにおもひ立たち侍まはるを、同行どうぎやう曾良そうら何がしといふもの、多病たへいいぶかしなど袖そでをひかゆるに心たゆみて、きさがたといふ処ところより越路こちろにおもむく』

「さっぱり意味がわかりませんけど」

「芭蕉は『おくのほそ道』の旅で松島から湯殿山へ行って『語られぬ湯殿にぬらす袂たもとかな』とか詠んだあとなお善知鳥ぜんちとという鳥が鳴く外ヶ浜から蝦夷の千島が見えるところまで行きたいとしきりに思ったんですけど同行していた曾良そうらという者があなたは病気がちだから不安ですと袖を引いてとめたので心が弱より象潟ぞうがたというところから北陸へ行きましたゆうよなこととして」

「蝦夷が千島というのが出てきますけど」

「北海道のたくさんの島という意味ですね」

「芭蕉はそれが見たかったわけですか」

「津軽半島の外ヶ浜まで行きたいものだなあと」

「その外ヶ浜から北海道のたくさんの島を眺めてみたものだなあと」

「外ヶ浜はお能の世界では善知鳥という鳥が住んでることになってましてね」

「それで善知鳥が鳴く外ヶ浜ゆうわけですか」

「もちろん凍えそうな鷗うが鳴いていた可能性も一概には否定できないと思いますけど」

「歌の話はよろしねん」

「ところが『おくのほそ道』の旅に随行していた曾良という門人にストップをかけられてまして」

「あなたは病気がちなんですから外ヶ浜へ行くのはやめときましよう」と

「ですから象潟まで行って『象潟や雨に西施せいしが合歡がくわんの花』とか詠んだあと日本海沿いに引き返しました」

「西の能登半島のほうへ進んだゆうことですね」

『荒海や佐渡に横たふ天の河』とか詠みながら『おくのほそ道』の旅がつづいたわけなんですけど君」

「どないしました」

「芭蕉も思わず古池に飛び込んでしまうほどの信じられないような驚くべき事実が判明したんです」

「またそれですか」

「これが驚かずにいられますか」

「いったいなにに驚いてますねん」

『幻住庵記』の米沢家本には芭蕉が北海道へ行きたくていたとはただのひとことも書かれていなかったんです」

「そうゆうたらそうですね」

「芭蕉はただ北海道のたくさんの島が見えるところまで行きたかっただけで」

「津軽半島の外ヶ浜まで行きたいと思つたとは書いてありましたけど北海道に渡りたいとは書かれてませんでした」

「なにしろ上野発の夜行列車もなければ青函連絡船もなかった時代です」

「その話はどうよろしやる」

「にもかかわらず伊賀市は芭蕉が北海道へ行きたくていたからという理由でさつぽる雪まつりに芭蕉の雪像を設置するための予算案を計上したんです」

「ちよつとおかしな話ですね」

「つまりその予算案には芭蕉も思わず旅に病んで夢が枯野をかけめぐり犬は喜び庭かけまわるほどの恐るべき陰謀が秘められていたわけなんです」

「君そんなんばっかりですがな」

「ここで念のために確認しておきますと芭蕉が北海道へ行きたくていたというのは大うそです」

「大うそゆうたら語弊がありますけど」

「つまり虚偽の情報なわけです」

「そしたら伊賀市は虚偽の情報を根拠にさつぽる雪まつり関連の予算案を組んだわけですか」

「水面下で悪辣な陰謀をめぐらしてでも芭蕉の雪像を登場させたかったゆうことでしょうね」

「けどぶつうそこまでしませんやろ」

「たしかにちよつと信じられない話ではあるんです」

「どのへんが信じられないんですか」

「まず誰も疑問を抱いていないという点ですね」

「疑問といえますと」

「芭蕉が北海道へ行きたくていたという話を聞かされた人はたいはいほんまかいなと思うはずです」

「江戸時代の話ですから」

「芭蕉は赤穂浪士が討ち入りしたころにはもう死んでしもてたぐらい昔の人ですから」

「赤穂浪士はとくに関係ないと思いますけど」

「だというのに君程度の人間でも抱いたさうゆう疑問を関係者の誰ひとりとして抱いた形跡がないんです」

「君程度の人間ゆうのはやめなさいゆうてますがな」

「少なくとも十年に一度バシヨースンガーバシヨースンガーゆうてわいて出てくるほどの伊賀市民のかたなのであればですね」

「そうゆういいかたはまずいのとちがいますか」

「当然疑問を抱いて家に帰ってから『幻住庵記』の北海道にかんする記述を確認するはずなんです」

「それはそうでしょうね」

「なにしろ十年に一度バシヨースンガーバシヨースンガーゆうてわいて出てくるほどの人なんですから」

「それはもうええねん」

「ご自宅に『幻住庵記』が収録された本の一冊や二冊はご所蔵のはずですし」

「そんなことわかりませんがな」

「かりにご所蔵でない場合でも芭蕉翁記念館に電話を入れたら疑問はすぐに氷解いたします」

「記念館には専門家がいらつしやいますから」

「ところが実際には芭蕉が北海道へ行きたがっていたと聞かされてへえそうでんのかで終わってるんです」

「そんな感じがしないでもないですね」

「ですから十年に一度バシヨースンガーバシヨースンガーゆうてわいて出てきてるゆうてもですな」

「バシヨースンガーはもうやめませんか」

「じつはみなさん芭蕉のことをろくにご存じないのやないかという気がしてきまして」

「推測だけでものゆうたらあきませんがな」

「というよりこうなると芭蕉がどうこうゆう以前に一般的な常識の有無が問題になる気もいたしますけど」

「そこまでゆうことないのとちがいますか」

「でも『幻住庵記』の本文を確認しようとした関係者がひとりもいなかったとしか思えないんです」

「それかてただの推測ですがな」

「ですからそのへんの事実関係がどうであったのか伊賀市議会あたりで厳しく追及していただいたほうがいいのかもしれないけどそんなことはとても無理でしょうしね」

「無理と決めつけたらあきません」

「けどこの問題を追及しようと思っただらどうしても教養と見識が必要になりますから」

「君そんなこといいますけど伊賀市議会にも教養と見識を兼ね備えた先生はいらつしやいますやろ」

「いや伊賀市議会でそんな先生を探すゆうのは君」

「なんですなねん」

「北海道でアフリカ象を探すようなもんですがな」

「なんでアフリカ象が出てきますねん」

芭蕉さんいつまた帰る

「なんともおかしな話でしてね」

「たしかにかなり変です」

「表面上の事実から判断したら伊賀市が大うそをついてたことにまちがいはありません」

「大うそと表現していいかどうかはともかく『幻住庵記』には芭蕉が北海道へ行きたいと思つていたというようなことはいっさい書かれていませんでした」

「ところが伊賀市は『幻住庵記』にそう書いてあるという虚偽を申し立てて市民を瞞着したわけです」

「そこまで悪辣な陰謀をめぐらしてでもさっぼろ雪まつりに芭蕉の像を設置したかったゆうことですけど」

「それほんまなんですかね」

「ほんまもなにも君がゆうてたことですがな」

「けど『幻住庵記』の米沢家本に北海道が出てくるといふ事実を目をつけるのはふつうの人間にはとてもできないことですから」

「それなりの知識が必要ですからね」

「しかも米沢家本の記述にもとづきながら芭蕉が北海道へ行きたがつていたという虚偽の事実を捏造するよくな手の込んだ小細工まで弄してるんです」

「その虚偽の事実が予算案の根拠になってました」

「そこまでの芸当が伊賀市役所のみなさんのおつむで可能かどうかゆうことになりますと」

「君またそんなことゆうてますけど」

「たぶん死んでも不可能でしょう」

「またそうやって決めつけてますけど」

「そしたらこの一連の悪辣な陰謀はそもそも誰によつて仕組まれたのかと思ひ悩んでいたある日のこと」

「なにがありました」

「伊賀市議会の議事録から芭蕉も思はずふるさどで臍の緒に泣いてしまうほどの信じられないような驚くべき事実が浮かびあがってきたんです」

「きようはよう浮かびあがつてくる日なんですな」

「昨年九月十八日に開会された予算常任委員会においてある委員から質問が出されました」

「さっぼろ雪まつりにかんする質問ですか」

「それに対して『そもその発端は、これは市民の方からの御提案がございました』という市長答弁があつたんです」

「もともと市民の提案やつたんですか」

「でもそれならそれでまた芭蕉が思はず鳥や魚といつしよに泣いてしまうほどの信じられないような」

「驚くべき事実が浮かびあがってきたわけですね」

「事実というかある疑問が浮かんでくるわけです」

「どんな疑問ですもんね」

「裏は取らんかったんかという疑問です」

「といいますと」

「なんらかの情報が寄せられた場合その真偽を確認するのが裏を取るゆうことなんですけど」

「そしたらこの場合はなにを確認しますもんね」

「その市民からの提案にはおそらく米沢家本『幻住庵記』の情報が含まれていたはずですよ」

「提案の根拠になつてた文章ですから」

「つまり伊賀市は米沢家本に実際に目を通して提案の根拠を確認しなければならなかったんです」

「確認したら芭蕉が北海道へ行きたがつていたとは書かれていないという事実が判明しますよ」

「そうした事実を知りながらあえて大うそをついたのかそれとも米沢家本を確認する労を取ることなく市民提案を鵜呑みにして結果的に大うそをついたのか」

「それはぜひとも追及するべきことやないんですか」

「けど伊賀市議会は北海道のアフリカ象ですから」

「そんなん君が勝手にゆうてるだけのことですがな」

「ばおーッ。ばおーッ」

「なにも象の鳴き真似することないと思いますよ」

「でもまあ伊賀市議会の先生がたがおんどれやあほんだら議会なめとつたらえらい目に遭わずどころおんどれやあほんだらおんどれやと待ったをかけてくれたおかげでなんとかことなきを得たわけですから」

「そうゆうことになりますか」

「そんなもんさつぼる雪まつりに芭蕉の像が登場してその前で伊賀市の人間が芭蕉さんの夢は北海道へ来ることでございましたとか説明したりしたら君」

「伊賀市はちよつと恥ずかしいことになつてたかもしれませんね」

「話そのものはかなり面白かつたんですけど」

「さつぼる雪まつりに参加することですか」

「たとえば十年前の伊賀の蔵びらきではですね」

「またその話ですか」

「本誌第二十三号の漫才でも指摘したとおりちまちましたご町内イベントを寄せ集めて関係者がひとりよがりには舞いあがつただけやったんですけど今回の話はそうゆうのとは明らかに一線を画してますからね」

「北海道で開催される著名なイベントに参加するゆうだけでも過去に例のない話ですよ」

「つまり『幻住庵記』は必要なかったんですよ」

「どうゆうことですかねん」

「生誕三百七十年芭蕉さんが行くさつぽろ雪まつり。ただそれだけのことでよかったです」

「その場合なにが根拠になるんですか」

「さつぽろ雪まつりに参加することは伊賀市のPRになりやすゆうだけで事業の立派な根拠ですがな」

「費用対効果の問題は」

「実際にやってみないことには具体的な効果なんか誰にもわかりません」

「そしたら『幻住庵記』がどうのこうのと理由づけする必要はなかったわけですか」

「そんな小細工はまったく必要ありませんでした」

「いわれてみたらそんな気もしてきましたけど」

「芭蕉さんと北海道はなんの関係もありませんけどええPRになると判断いたしましたので伊賀市の大切な税金をつかって芭蕉さんに雪まつり行ってもらいまーすゆうて市議会や一般市民に説明を尽くしたらそれです全然OKやったと思いますね」

「けどそれではまるで芭蕉を伊賀市のPRに利用してみたいいな感じですけど」

「芭蕉というビッグネームを伊賀市のPRに利用するというのは恥ずべきことでもなんでもありません」

「そんなもんですか」

「ろくに芭蕉のことも知らんくせに十年に一度バシヨ一サンガーバシヨ一サンガーゆうてわいて出てくる害虫のみなさんは横に置いてすね」

「害虫のみなさんとかゆうたらあかんがな」

「ちゃんとした知識と見識にもとづいてしっかり考えた企画によるPRをばんばん展開したらええんです」

「ご町内イベントではどうしようもありませんか」

「ですからさつぽろ雪まつりに参加できなかったのはちよつと残念なことでしたね」

「参加してたらどうなりました」

「それは参加してみないとわかりませんがそこそこ図にあたってた可能性もゼロではないですから」

「図にあたってたらその先はどんな展開ですか」

「芭蕉が全国各地の各種イベント会場をたどりながら伊賀市をPRすることになってたかもしれません」

「芭蕉さんがさつぽろ雪まつりをスタート地点にして現代版『おくのほそ道』の旅に出るわけですか」

「そうなったら伊賀には帰ってくれないでしょうね」

「なんで芭蕉さん帰ってくれませんねん」

「そろもうスタートが雪まつりだけにゆきはあつても帰りはありません」

「大喜利やってるんやないてゆうてますがな」

